

◆日本の鯨食文化を未来につなぐ

日本の鯨食文化

縄文時代の遺跡から鯨の歯や骨が発見され、日本人の食生活に長い歴史を持つことが知られている鯨文化。室町時代末期に捕鯨技術が進み、江戸時代には最初の捕鯨専門組織である「鯨組」が誕生し、日本の鯨文化を育み、太平洋戦争が終わってからの日本の食糧難の時代、捕鯨船団が遠洋で捕獲し日本に供給した鯨肉は、食糧不足に悩む日本人の貴重なタンパク源でした。

商業捕鯨モラトリアム

日本は1951年にIWCに加盟。1988年商業捕鯨モラトリアム（商業捕鯨の一時中止）処置が取られて以降商業捕鯨を行わず、南極海と北西太平洋において鯨類捕獲調査を実施しながら、IWC総会の中で商業捕鯨再開を30年にわたり訴え続けてきました。しかしながら反捕鯨国が数的優位にあるIWCでは、日本が鯨類捕獲調査において得られた科学的データをもとに商業捕鯨の再開を訴えてきましたが、受け入れられることはありませんでした。

2018年9月にブラジル・フロリアノポリスで開催されたIWC隔年総会において日本は、IWCの捕鯨支持国と反捕鯨国の共存と、資源が確保されている一部鯨種の商業捕鯨再開を盛り込んだ日本提案を提出しましたが、賛成27、反対41、棄権2で否決され、一方では商業捕鯨モラトリアムの継続など鯨類資源の保護を中心としたブラジル提案のフロリアノポリス宣言が採択され、いかなる商業捕鯨も認めないとする保護主義が強まる結果となりました。

この結果を受け、日本政府はこのままIWCに加盟していても商業捕鯨の再開は見込めないと判断し、この年の12月にIWCからの脱退を宣言しました。

商業捕鯨の再開

長きにわたり調査捕鯨を続け、科学的根拠に基づく鯨類資源の持続的利用と商業捕鯨再開を目指してきた日本は、2018年12月にIWCからの脱退を宣言し、半年後の2019年7月から排他的経済水域内での商業捕鯨を30年ぶりに再開しました。